≪全国市議会議長会研究フォーラム in 盛岡≫

日時：令和６年10月９日（水）13:00~18:40
10日（木）9:00~11:00
場所：トーサイクラシックホール岩手（岩手県民会館）

第１日目 パネルディスカッション

「地方議会の課題と主権者教育」

＜主権者教育の新たな展開＞

コーディネーター　　静岡大学人文社会学部法学科教授　井柳美紀 氏

議長会による主権者教育の推進

〇地方議会の課題：投票率の低下、無投票当選の増加、議員の性別や年齢構成の偏り

〇議会に対する関心を高め、理解を深める主権者教育を一層推進すること

〇いわゆる出前講座や模擬議会など、議会自らが主体的に行う主権者教育の取組に対する支援を講ずること

＜誰がための主権者教育か＞

パネリスト　　法政大学法学部教授　土山希美枝 氏

〇市民と議会の間にあるもの、若者と社会の間にあるもの

・議会と市民の間にある「へだたり」

議会がしていることと議員がしていることの理解度に関する調査

・若者と社会の間にある「へだたり」

自分や自分の意思決定、作用に対する意思決定の弱さ

〇議会のありかた

・議会が「教育」として行えること：対象者、手法、教育的効果

・議会が主権者教育をすべきではない:議会としては将来の市民の育成

・主権者教育は、学校:具体的、実践的教育の場

〇議会の機能

・「高校生議会」の取組拡張、議会の本来の機能と「子ども・若者議会」の機能

「学び合う」という機能を議会という場で発揮

対話性・議論性・地域性・政策性（争点性）/ヒロバ性「集合的意思形成」

・子ども・若者の為の議会と学校との連携

〇議会のすべきこと：資源の用意、「本来の」機能への意味付け、それぞれの現場での確認

＜若者の政治・社会への意識から考える主権者教育の必要性＞

パネリスト　一般社団法 WONDER EDUCATION 代表理事
総務省主権者教育アドバイザー　　越智大貴 氏

○若者の政治や社会のとらえ方：「18 歳意識調査（2024）」
・政治に関心がないから選挙に行かないのではなく、どうせ変わらないから選挙に行かない
・社会のために役立ちたい

○若者にとっての政治や社会
・関心がないわけではなく、参加の意義を感じない
＊議会の役割：交流の機会の増加、「自分の意見が聞いてもらえる」「自分のアイデアが反映されるかも」と感じられる機会の増加

○学校現場における主権者教育の現状
・主権者教育：法律の話、選挙についての知識や啓発を行う教育
・「昭和 44 年 10 月 31 日文部省初等中等教育局長通知」などの影響
・「教育基本法」第 14 条による政治的中立への配慮
→選挙についての知識や啓発を行う教育がメイン
＊議会の役割：リアルな政治が扱いやすいような環境づくり
外部団体（学生）と超党派による主権者教育チーム

○13 年間の主権者教育の取組
・WE　CITY：こどものまち→「納得会(自分の意見)」
・こどもワークショップ：こどもの意思表明→行政の政策に反映
・子ども議会：議員との交流会→キャリア教育要素を入れた学びの場
＊政治家との交流は、子どもたちの政治意識の醸成に大きく影響
＊今後も議員との交流機会設定

＜学校の未来を考える＞パネリスト　　読売新聞東京本社　渡辺嘉久 氏

○50 年後の学校における 3 つの選択肢のメリット、デメリット

①授業料引き上げ	メリット：受益者負担　デメリット：親の負担増
②地域住民の授業料負担	メリット：親の経済状況にかかわらず通学可能 デメリット：住民の負担増
③借金による運用	メリット：誰の負担増無しに学校生活が充実 デメリット：借金返済の保証

＊情報が未来を左右：未来決定のために必要な情報とその整合性

○「政治とつながる」こと

・「政治」は「未来」：　「政治を考える」は「未来を考える」

＊自分の未来を創造する

○生きたい未来のためにすべきこと

・時間は未来から流れてくる

・理想の未来、「あるべき未来」の為に必要なこと：重要な意思決定は7世代先の人々になりきって考えること

＜盛岡市議会の取組＞　　パネリスト　　盛岡市議会議長　遠藤政幸 氏

○盛岡市議会における「高校生議会」

・平成28年12月より　高校生議会開催の検討（議会運営委員会）

・議会による主権者教育として、高校生が議会を経験する機会設定

・議員にとっても刺激を得る機会

○盛岡市議会高校生議会の開催目的

「次代を担う高校生が選挙及び政治並びに身近な地方行政への関心を高めること」

①盛岡市議会として主権者教育に取り組むものであること

第1回から、盛岡市議会主催により開催、参加者は高校生と盛岡市議会議員

②議会の役割を理解し、市の施策を身近に感じる機会であること

高校生が1日の行事を通じて、定例会の議案審査の流れを疑似的に体験

③議員が高校生と直接交流する場であること

高校生と市議会議員が、市政の課題について意見交換し、提言をまとめる

○高校生参加者の声：「市政に関心を持った」「議会の役割が理解できた」

○「もりおかmiraiおでかけミーティング」：市議会が大学に「おでかけ」し、学生と意見交換を行う事業

・盛岡地域の3つの大学で開催

・議員がファシリテーターとなり進行

・ワールドカフェ方式を採用し、市政について意見交換

第２日目　課題討議「主権者教育の取組報告」

＜地方議会と主権者教育＞

コーディネーター　東北大学大学院情報課学研究科准教授　河村和徳 氏

○理想

・主権者教育は、基本的にシチズンシップ教育

・地域の社会的課題を認識し、経験を含めて社会を改善

・ディベートなどを通じて社会の多様な意見を理解

○現実

・知識の享受（制度の理解）が中心、正解の教示

・投票者重視（模擬投票）の教育

・実施の主体が「公（教育委員会、選挙管理委員会)」連携の不十分さ

＊自宅通いの生徒の方が投票率高い

○選挙年齢の 18 歳引き下げの論点

・2016 年参議院通常選挙から見える若者の投票参加・投票行動

18 歳の投票率高く、19 歳は低い

都市部で高い→自宅生が多い所ほど投票率が高い

両親の投票と同じ投票傾向

・知識の提供だけでなく、実践の場の提供も必要

○現在の主権者教育で感じる限界

・模擬投票に偏りすぎた教育

・政治的中立の足枷

・ノウハウ不足

○政治に参加する方法

・署名する、選挙で投票する

・陳情活動、デモの実施

・「議員と会う」ことは、普段と異なる場として有効に機能

・会うべき段階の検討

・会い方の検討：個人ではなく組織で、オンライン、代表者の発表

＜高校生の議会傍聴と意見交換会＞

事例報告者　　長野県伊那市議会　前議長　白鳥敏明 氏

○経緯

・平成30年の市議会議員選挙　無投票（定数21人）：議員のなり手不足に危機感

・平成30年6月「魅力ある議会づくり検討会」設置：開かれた議会、議会改革の一環

＊議会への関心向上方策：若い世代、高校生の議会傍聴、高校生との意見交換等の企画

・令和元年6月　高校生徒の議会傍聴

・令和元年7月　高校生徒との意見交換会

・令和2年度、3年度　新型コロナのため中止

・令和4年度　市内全高校訪問、議会傍聴・意見交換会の実施依頼

・令和5年3月　高校生徒による探求学習発表、懇談

・令和5年6月　高校生との議会傍聴2回、高校生徒の取組発表と意見交換会

・令和5年7月　高校生徒との意見交換会

・令和5年8月　高校生徒による探求学習発表と意見交換会

○成果

①高校生からの意見・提案

・議員と意見交換することの大切さ

・意見交換会のような場を、生徒の方から申し入れできるように

・学校に、市への意見箱設置

・災害時に校舎を避難所として利用、運営スタッフとして高校生が参画

②意見交換に参加した高校生による請願の提出→全会一致で採択

③高校生からの要望を執行部へ：通学路の外灯増設の要望

担当常任委員会が現地確認、執行部へ要望提出

○課題

・SNSをもっと活用すべき

・議事録は活字が多い。端的な内容にして読みやすいようにすることが必要

・興味を持ってもらえるよう議員がやっていることをもっとアピール

・意見交換会を定期的に行って、多くの意見を汲み取る

○伊那市中学生キャリアフェスへの参加

伊那市内の中学2年生が集まり、地域の企業や団体を知り、将来の進路について考える学びの場の提供

＜四日市市議会主権者教育の取組＞

事例報告者　　四日市市議会議員（第 83 代議長）　諸岡覚 氏

出前型意見交換会「ワイ！ワイ！GIKAI」

（Yokkaichi:四日市と Youth:若者の 2 つの Y「ワイ」）

○経緯：正副議長の選挙公約

・令和元年 5 月　議長選挙で公約

・令和元年 6 月　議会報告会とシティ・ミーティングの見直しを提案

・令和元年 8 月　出張形式の「新しい何か」を提案

・令和元年 11 月　対象を若年層とする提案

・令和 2 年 1 月　対象を高校生・大学生とすることを確認

・令和 4 年 11 月　名称を「ワイ！ワイ！GIKAI」とし、地域の高校・大学に出向いてテーマをもとに意見交換を開催

・令和 5 年～　各常任委員会が、中学、高校、大学等で年 1 回以上開催

○今後の展望

・令和 6 年度の開催予定

総務委員会	北星高校
教育委員会	中部中学校
産業生活委員会	四日市商工会議所青年部
都市・環境委員会	四日市大学

＊将来的には、各種業界団体、各種労働組合等、幅広い対象との交流

○高校生議会

対象者：北勢地区（県北部）の公立高校、特別支援学校高等部の生徒
市内の私立高校、特別支援学校高等部の生徒

募集人数：概ね 30 名

開催方法：テーマごとの委員会で意見交換、本会議場で意見書、採決

○「四日市市議会だより#」の発行

・7 月、市内全中・高校生に配布→夏休みの自由研究、親子で議場見学
年々希望者増加

＊とにかく 1 回やってみることが重要　try&error

○SNS 発信

・ホームページ　・まちだん

・Facebook　・Instagram

・X

＜山鹿市議会が取り組んだシチズンシップ教室
～なりたい職業ランキングベスト 10 入りを目指して～＞

事例報告者　　熊本県山鹿市議会議長　服部香代 氏

○山鹿市議会の課題

・開かれた議会になっていない

・住民の理解と関心が得られていない

・なり手不足

＊議員のスキルアップ必要

○小学校でのシチズンシップ教室開催理由

・議員のなり手不足の要因をなくす

・「民主主義」を学ぶ：政治に主体的に関わる

＊「議論して意見を集約していく」経験を子どもの頃からしておくことが大切

○シチズンシップ教室で伝えたいこと

・市議会について知る

・議員の仕事を理解する

・選挙の意義や、投票の大切さがわかる

○企画～実施

・まず教育長！

・全議員へ提案

・校長会に協力依頼

・選抜：議員と資料検討・作成

・議長による議員への模擬授業

・各学校の担当を希望により決定

○学校

・各校の代表者が日程調整

・読み聞かせボランティアへ依頼

・市選管から投票箱を借用

・投票用紙の印刷は議会事務局

・先生方からのご協力

○ギカイを知ろう

① 議員と児童会

② 議員の仕事

③ 山鹿市議会

④　「ポリポリ村のみんしゅしゅぎ」を使って投票、開票結果
⑤　自分たちのまちの決まりは自分たちで決めよう
⑥　議員になったワケ
⑦　あなたも議員になれる！
＊「なぜ政治が必要なのか」を伝える→見せ方も大切→政治への興味付け
＊「政治をあきらめない」

＜矢板市への展望＞

矢板市議会において、９年前までは「議会報告会」を開催してきたが、８年前に「政策提言の為のテーマを設けた意見交換会」の開催を提案させていただいた。市内３地区での意見交換会から、近年は各種団体との意見交換会、自由参加の意見交換会を行っている。高校生との意見交換会も、議場、各高校、市役所内、施設等で様々な形態で行って来た。

今回の研究フォーラムでは、各地の先進事例について、具体的に知ることができ、大変有意義であった。また座席の周囲の他市議会の皆さんから、「意見交換会・報告会」の手法や課題を伺えたのも有難かった。

今後は、小中学生との意見交換会、ワールドカフェ形式も視野に入れ、「意見交換会のありかた」を調査研究し、議会に対する関心を高め理解を深められるような主権者教育を推進すべきと考える。

主権者教育の推進には、議会への興味付けの為に魅力ある「議会だより」「HP」作成、SNS 発信が必須である。SNS 発信においては、Facebook 矢板市議会のフォロワーが 300 人越えになったので、更なる周知を図る。X との連携強化、Instagram による配信を目指して「未来を築く」若者たちに身近な存在となるよう取り組みたい。

≪全国市議会議長会視察「官民連携の取組」≫

「移住・定住の促進及び関係人口の創出：
盛岡という星でプロジェクト事業」

日時：令和６年10月10日（木）13:20~13:50
場所：盛岡という星でBASE STATION

＜「盛岡という星で」プロジェクトの沿革＞

○行動背景：若者を中心とした人口流失加速→関係人口に焦点を当て移住定住促進
○ターゲット：関係人口増加の為にターゲットとなる個人の熱量に合わせたアプローチ
①盛岡への関わりに対する思いや熱量が低い層
→関わりやすいSNS軸でのプロジェクト開始
幅広く関係を持つことが可能なInstagram、X、Facebook 、YouTubeの活用
②盛岡への関わりに対する思いや熱量が高い層
→移住相談、体験型ツアー、イベントなどを実施し、要望に応じた個別対応実施
○関係性強化：SNSで繋がり積極的に関わりたい人が増加
○外部環境変化：感染症拡大に伴い、盛岡と積極的に関わりたい人との対面的活動が困難
○交流拠点整備：感染症の流行が落ち着いた将来を見据え、関係人口の交流拠点の設置準備を開始
○現状：東京圏流出層だけではなく、地元の高校生や大学生(関係人口予備軍)を対象に盛岡への繋がりを強化できるよう、交流拠点を生かした取組実施

＜東京圏の若年層を対象とした情報発信＞

○目的
・本市における移住・定住・関係人口対策に係る事業を推進する為、「東京圏の若年層」等を対象とした情報発信
・「盛岡」をキーワードとしたコミュニティ等、今の盛岡の暮らしに関する情報をSNS等で発信する事で、盛岡の日常を想起する機会を提供
○取組内容
・SNSを活用した情報発信：homesickdesignが専門配信
企画立案、取材、撮影、デザイン、コピーライト等情報発信の一切の業務
・東京圏等を中心とした「盛岡」をキーワードとしたネットワークの形成
・プロモーションツールの制作：カレンダー等

○令和６年度における特徴的な取組

・BASE STATION のコミュニケーションや交流を促す連動型規格の実施

・SNS と公式 HP の連携による年３回の特集企画の展開

・県外在住者登録制度「MORIOKA CONNECTION ID」と連携した情報発信

＜関係人口等交流拠点「盛岡という星で BASE STATION」の設置＞

○目的

・東京圏の若年層向けの情報発信等の取組を効果的に行う

・関係人口や地元の高校生等の若者が、地元の企業や団体が抱える地域課題に関わる機会を創出する

○機能

・移住相談：市職員常駐

・情報発信：関係人口増

・盛岡広域の暮らし体験ツアー等の受け入れ

・地域課題×関係人口マッチング

・高校生・大学生等×地域課題マッチング

・シェアオフィス、ギャラリー

＜矢板市への展望＞

矢板市の類似施設としては、１Ｆに「ふるさと支援センターTAKIBI」２Ｆに「シェアオフィス SLOW WORK」が入った「ココマチ」があげられる。

「TAKIBI」は、地域おこし協力隊、地域支援員による移住定住相談、関係人口創出のための各種取組、シェアオフィス、シェアキッチン等を行っている。高校生版地域おこし協力隊「YAITA ALL DIRECTIONS」の活動拠点でもあり、高校生主催の魅力あふれる各種事業が開催されている。

「SLOW WORK」では、著名人や矢板に関わる人のレクチャーと少人数でのディスカッションを含んだ「SLOW TALK」を、毎月開催し、移住者、各地の地域おこし協力隊、まちおこしに興味を持つ参加者等の貴重な情報共有と意見交換を可能にして、関係人口、交流人口増に繋げている。指定管理者の御尽力により県外からの参加者もいる。移住者たちは口をそろえて「矢板は素晴らしい」と語る。矢板市民一人一人がその魅力を再発見できれば、定住者は増加し、魅力を発信すれば、移住者も増加する。

全国に視察に行って痛感するのは「矢板市の発信力不足」である。先進的な施策をしているにも関わらず、知られていない。「知られていないのは無いのと同じ」である。

議員になった時から「縦割りでなく斜め割りで連携を」と言い続け、近年は、担当課だ

けではなく、横断的に連携する体制が、整ってきたのを感じる。矢板の施策について職員だけでなく、議員一人一人が発信することで、矢板の魅力が周知されていくであろう。
移住定住促進への第一歩は「矢板を愛する市民を増やすこと」である。それを実践しているBASE STATIONのような施設を、大勢の職員、地域おこし協力隊の方にも視察していただきたい。

「動物公園再生事業:盛岡市動物公園ZOOMO」

日時：令和6年10月10日（木）14:15~16:15
場所：盛岡市動物公園ZOOMO

○目的：新たな付加価値をつくる再生事業
○取組内容
・令和元年　株式会社もりおかパークマネジメント」設立
・従来の行政の枠組みに捕らわれず、行政の規制を緩和しながら民間企業同士のつながりやフットワークを生かす、PPP(パブリック・プライベート・パートナーシップ)を採用し運営
・令和5年4月　リニューアルオープン
　森や林、丘陵地をそのまま生かした動物園
　市民の憩いの場
　動物福祉をコンセプトに、社会教育、生物多様性保全の拠点
　様々な取組
・令和6年4月　全国初の動物園内フリースクール「ぐるぐるの森」開校
　社会問題解決の一助

＜矢板市への展望＞

世界初の動物園は、ドイツのベルリン動物園で当初「大人の為の動物園」として発足したそうだ。園内は過度な装飾は無く、落ち着いた雰囲気でゆっくり楽しめる。「市民の憩いの場」としてリニューアルオープンしたZOOMOにも同じ雰囲気を感じた。

上野動物園等の環境整備に携わった植物学者の皆様とご一緒した「マダガスカル研修」の際、「動物たちの環境を現地と近づける為のたゆまぬ努力」を伺った。その真逆をいく「現状の地形、環境をそのまま生かした」ZOOMO。動物たちが何不自由なく大自然の中、動いていた(ように見受けられた)のが不思議であった。

本当に久しぶりの動物園で懐かしい故郷に戻ったような気分になった。どの議員の目も輝き、誰もが同じ空間を共有する身近な仲間、旧友のように感じられた。フリースクール

「ぐるぐるの森」を開校し、社会問題解決の一助となっているのも頷ける。ここでは動物も人間も子どもも大人も誰もが心開ける仲間になれそうだ。

「不登校には、子どもでなく親の指導を」と教師時代にカウンセラーから伝えられた。「子どもが良く育つには親の笑顔」とも言われ親の精神状態が子どもの健全な生活に大きく左右する。親子で家族で楽しめる、癒される居場所を作ること、それを動物園に作る発想が素晴らしい。

矢板市では、「子育て環境日本一！」を掲げた遠藤元市長の時代に、「長峰公園」が整備され、市内外から大勢の訪問客がある。こういった既存の施設を利用し、近隣の幼稚園、保育園、児童施設、障がい者の施設と連携した「フリースクール構想」が矢板でも可能である。不登校の子ども達は、頭の良い子や優しい子が多く、感受性が強すぎて同学年にはなじめなくても小さい子達、障がいのある子達の面倒をよくみられるタイプの子も多い。自己肯定感、成功体験が得られれば、人生は変わっていく。固定観念に捕らわれず、「子ども達の為に、また子ども達を育ててくれている親達の為に何ができるか」取り組んでいくことが明日の矢板市を築くことになるだろう。